



時間的後続性を表す従属節：
「シタあと,あとで,あとに」を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 俊臣 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004568

時間的後続性を表す従属節

——「～シタあと、あとで、あとに」を中心として——

馬場 俊 臣

1 はじめに

ある二つの事態の時間的前後関係を表す従属節を作る形式には「～スルまえ、～スル／～シタとき、～シタあと」など、さまざまな形式がある。本稿では、(1)a～cのように、主節（後件）で描かれている事態（「遊びに行った」）（以下、後件事態と呼ぶ）が、従属節（前件）で描かれている事態（「雪掻きをした」）（以下、前件事態と呼ぶ）に、時間的に後続することを表す従属節のうち、「～シタあと、～シタあとで、～シタあとに」という形式を中心的に取り上げ、それぞれの使い分けや基本的特徴を考えてみたい。

- (1)a 雪掻きをしたあと、遊びに行った。
- b 雪掻きをしたあとで、遊びに行った。
- c 雪掻きをしたあとに、遊びに行った。（注1）

まず、2章で先行研究を取り上げ、すでに使い分けの現象面の指摘は行なわれてきたが、その要因や基本的特徴の説明が不十分であることを述べる。3章、4章では、主に、実際の用例の傾向に基づいて、各形式の特徴を考察する。5章では、類似の形式である「～シタあとは、～シタあとから」の特徴を補足的に述べる。6章でまとめを行い、「～シタあと」は「前件事態による、後件事態の状況設定の表示」、「～シタあとで」は「二つの生起・完結的事態の時間的順序の表示」、「～シタあとに」は「(一連の事態として認識される)前件の生起・完結的事態から後件の生起・完結的事態への場面転換的継起の表示」という基本的特徴を持つことを述べる予定である。

2 先行研究

「～シタあと、～シタあとで、～シタあとに」の使い分けについては、これまでいろいろな指摘がなされてきた。しかし、各形式の使い分けが生じる要因について十分に納得できる説明をしているものはない。ここでは、「～シタあと、～シタあとで、～シタあとに」（および「～シタあとから」を含めて）各形式の使い分けに関して、先行研究が取り上げた観点を次の5つに大きくまとめて、簡単にそれぞれの問題点および本稿3章以降の考察に関連する事柄を見ていく。

- ① 前件事態の時間指定に関する性質
- ② 前件（従属節）の構文的性質
- ③ 前件事態と後件事態との時間的接性
- ④ 前件事態と後件事態との関係付けの意識
- ⑤ 後件事態の性質

「① 前件事態の時間指定に関する性質」とは、前件事態が正確な時間を表しているかどうか、また、後

件事態の開始時点を前件事態が明示しているかどうかということである。李1983は、「あと」と「あとから」（注2）を比べて、(2)の「あとから」は「あと」に置き換えられないとし、「あと」の特徴として、後件の「動作、状態の発生する時点がはっきりしない」「発生する時点は漠然」としていることを指摘した。また、久野1973は、「あとで」について、(3)bが「非文法的」であるとし、その理由として、前件が「正確な時間を表すと、その文は不自然となる」ことを指摘した。

(2) 別れたあとから悲しみが始まった。(李1983より)

(3)a 10時ニナツテカラ家ヲ出タ。

b? *10時ニナツタアトテ家ヲ出タ。(久野1973より)

しかし、(2)の「あとから」は「あと」に置き換えても不自然さは感じられない。また、(3)bも「あとで」が完全に不自然であるとは感じられないし、「10時になる前に家を出ればよかったんだ。けど、10時になったあとで、家を出た。だから、遅刻してしまったんだ。」などの文脈を与えれば自然になる。つまり、前件事態の時間指定に関する性質が直接これらの使い分けに関係しているとは思われない。かりに、上記の例文の不自然さの指摘が正しいとしても、3章以降で述べるように、「あと」による「状況設定の表示」、「あとで」による「時間的順序の表示」という基本的特徴から間接的に派生した特徴として説明できよう。すなわち、「あと」は後件事態の発生時点を明確に示すのではなく、単に「状況」を示すので、後件事態の発生時点は「はっきりしない」「漠然」としているという特徴を持ちやすくなる（必ずしもそうでなくてもよい）し、「あとで」は時間的順序が明示されるために、時間的順序があまり問題とならない文脈では不自然に感じられやすいと説明することができる。

「② 前件（従属節）の構文的性質」とは、益岡1995において示されたものであり、一般的に、時を表す従属節で、「あと」のように格助詞を持たない場合は「時を設定する状況成分として機能し」「事態を叙述するために必要となる前提的情報を表す役割を担い、したがって、主張のスコープ・疑問のスコープには含まれない」、一方、「あとで」のように格助詞を持つ場合は「時を特定する格成分として機能し」「主節が叙述する事態を限定する役割を担い、したがって、主張のスコープ・疑問のスコープの中に含まれる」とする見方である。この主張は、「あと」とそれ以外の2形式「あとで」「あとに」との基本的特徴の違いをとらえる上で非常に示唆的な主張である。ただし、益岡1995では、同じく格助詞を持つ「あとで、あとに」の違いには触れておらず、これらの使い分けは、上記の構文的性質だけではとらえきれない。

「③ 前件事態と後件事態との時間的近接性」は、久野1973、鈴木1978などで指摘された観点で、「あと」は後件事態が前件事態の「直後」に起こる事態でも時間的に「間隔」をおいて起こる事態でもよいが、「あとに」は「直後」に起こる事態でなければならず、また、「あとで、あとから」は、「間隔」をおいて起こる事態により適するとする指摘である（注3）。

確かに、後件事態が「直後」に起こる事態か、それとも「間隔」をおいて起こる事態かで、使い分けがありそうであるが、決定的な使い分けとはならない。李1983が取り上げた(4)(5)の例文のように、「あとに」が必ずしも「直後」を表さない場合もあるからである。

(4) 田中さんが引越たあとに石村さんが移ってきた。(李1983より)

(5) 昼間の喧騒が去ったあとに闇の静寂が訪れた。(李1983より)

この前件事態と後件事態の時間的近接性は、客観的事態の間に存在する時間的近接性が直接反映したものと見るよりも、前件事態と後件事態との関係を表現者がどのように把握するか、すなわち、時間的な前後関係がある二つの事態を表現者がどのように認識して表現するかという点の違いに起因するものと考えられ、「直後」「間隔」という使い分けは、その結果生じる派生的なものであると見た方がよいであろう。

「④ 前件事態と後件事態との関係付けの意識」については、久野1973の「てから」の特徴の指摘に対す

る反論として、寺村1992が指摘したもので、「てから」の後件事態は、前件事態「以前ではない」という「話し手の含み」を相手に伝えようとするのに対し、「あとで」「あとに」はそうした「含み」はなく、「一般に、P（筆者注—前件事態）の生起のあと、それとまったく無関係に、偶然別のことQ（筆者注—後件事態）が起こった、という場合はアトデの方が適切だということはまちがいないと思われる。」と述べている点を取り上げたものである。すなわち、少なくとも、「あとで」に関しては、何らかの「含み」を生む表現者（話し手）の意識的關係付けがないという指摘である。寺村1992では、「あとで」と「あとに」の違いを必ずしも明確には述べていないが、この関係付けの意識は、前件事態と後件事態との関係を表現者がどう認識して表現するかという見方につながるものであり、上記「③」で述べたように、客観的事態に対する表現者の認識のし方、とらえ方の違いが反映するのではないかという予測につながる、重要な見方になる。

なお、久野1973では、「あとに」について、前件事態によって「生じた空白」を後件事態が「充たす」という特徴を挙げ、後件には、「空白を充たし得るような動詞」（生れる、来る、加わるなど）を含まなければならないと指摘しているが、「空白」「充たす」の意味が曖昧であり、これは後述するように、「あとに」の「場面転換的継起」という特徴の表面的な現れとして扱うべきであろう。

「⑤ 後件事態の性質」とは、後件事態が状態・継続性をもつか、それとも生起・完結性をもつかという観点である。「あと」の後件事態は、状態・継続性および生起・完結性のどちらの事態もとれるが、「あとで」「あとに」の後件事態は生起・完結性をもつ事態に限られ、「あとから」の後件事態は状態・継続性をもつ事態に限られるという指摘が、久野1973、鈴木1978、工藤1992などによってなされてきた。「あとで」「あとに」および「あとから」に関しては部分的な修正が必要であるが、典型例の使い分けに関しては問題はない。しかし、なぜそのような違いが生じるのかという説明が必要である。

3 「～シタあと」

本章では、「～シタあと」の特徴を、「～シタあとで、～シタあとに」（ここでは両者を一旦まとめて扱う）と比較しながら、考察していく。

まず、(6)(7)の「あと」は、「あとで、あとに」に置き換えると不自然になる。

- (6) ジョギングを始めたあと、ずっと体調がよい。
- (6') *ジョギングを始めたあとで/あとに、ずっと体調がよい。
- (7) 大学に入ったあと、毎日昼すぎに起きている。
- (7') *大学に入ったあとで/あとに、毎日昼すぎに起きている。

これは、すでに先行研究で指摘されているとおり、(8)のような、「あと」と「あとで、あとに」との後件事態の性質の違いに基づくものである。

- (8) 「あと」と「あとで、あとに」の後件事態の性質

「あと」の後件事態には、状態・継続性および生起・完結性のどちらの事態も取ることができる。

「あとで、あとに」の後件事態は生起・完結性の事態が典型であり、状態・継続性の事態は取りにくい（注4）。

このような後件事態の性質の違いがどうして生じるのか、その理由が明らかにされなければならないが、以下、「あと」と「あとで、あとに」のいくつかの違いを見ていきながら、「あと」の基本的特徴を探っていく。

実際の用例を見ると、「あと」は、(9)(10)のように、時間設定および期間設定の修飾語を取る用例が現れるが、「あとで、あとに」は、そうした用例はなく、それらの修飾語を取ると不自然になる。

- (9) ろう学校の教員をしたあと、35年前にここに聴覚障害者たちの寮を造った。(朝日、注5)
- (10) 中距離核戦力 (INF) 全廃条約に、米ソが合意したあと、年末からことしにかけて欧州では首脳
のひんぱんな往来が目につく。(朝日)
- (11) a その妙な噂を聞いたあと、しばらくしてその噂は事実だということが分かった。
b ? その妙な噂を聞いたあとで、しばらくしてその噂は事実だということが分かった。
c * その妙な噂を聞いたあとに、しばらくしてその噂は事実だということが分かった。

「あと」の場合、前件事態による時間設定以外に、修飾語による時間設定が新たに行えるというのは、「あと」は明確な時間設定を行なっているのではなく、前件事態が先に起こっている、その状況を設定しているだけという特徴があるからであろう。また、前件事態で状況設定だけを行うことは、後件事態の性質を限定せずに行うことができるために、後件事態には、状態・継続性および生起・完結性の両事態を取ることができるのである。期間設定の修飾語が取れる理由も同様に考えられる。

この「あと」による「前件事態による状況設定」という特徴は、益岡1995がすでに指摘しているように、表現の重点ないし焦点は後件事態にあることを示す、次のような文法的振る舞いの違いによく現れている。すなわち、「あと」の従属節では、(12) a のように、前件事態を疑問化しにくい。なお、後件事態は(13) のように疑問化できる。

- (12) a * 何をしたあと、ボーリングするの？
b 何をしたあとに/あとで、ボーリングするの？
(13) a お昼ご飯食べたあと、何するの？
b お昼ご飯を食べたあとに/あとで、何するの？

また、「あと」の従属節による(音声的強調の加わらない)選択疑問文に対する返答では、(14) a のように前件事態と後件事態との前後関係を否定しにくくなるようである。それに対して、「あとで、あとに」の従属節による選択疑問文に対する返答は、(15) a のように、容易にその前後関係を否定できるが、(15) b のように、後件事態を否定しにくいようである。

- (14) a 「空港に着いたあと、お土産を買ったかい？」
? 「いや、お土産を買ったあと、空港に行ったんだよ。」
b 「空港に着いたあと、お土産を買ったかい？」
「いや、空港に着いたあと、何も買わずにゲートに入っちゃったよ。」
(15) a 「空港に着いたあとで/あとに、お土産を買ったかい？」
「いや、お土産を買ったあとで/あとに、空港に行ったんだよ。」
b 「空港に着いたあとで/あとに、お土産を買ったかい？」
? 「いや、空港に着いたあとで/あとに、何も買わずにゲートに入っちゃったよ。」

このことは、「あと」は、前件事態で設定された状況を言わば既定のこととして扱い、その状況の下で起こった事態の有無を疑問化しやすいのに対して、「あとで、あとに」は、前件事態と後件事態との時間的前後関係も含めて、前件・後件全体の事態の有無を疑問化しやすいということであり、「あと」の「前件事態による状況設定」という特徴の現れと考えられる。

なお、上述のように、「あと」は「前件事態で設定された状況を言わば既定のこととして扱う」傾向があるが、これは、(16) a のように、確実に起こる未来の事態について、「あと」がもっともふさわしく感じられることと関連があるのではなかろうか。

- (16) a (機上にて) もうすぐ着陸するよね。空港に着いたあと、どうする？
b (機上にて) もうすぐ着陸するよね。? 空港に着いたあとで、どうする？

c (機上にて) もうすぐ着陸するよね. ? 空港に着いたあとに, どうする?

また, 傾向として, (17)(18)のように, 「あと」の場合は, 文末述語(動詞)に係る読みが出てきやすいのに対して, 「あとで, あとに」の場合は, 後続する動作動詞に係る読みが出てきやすいという違いもある。(17)の場合, 「あと」の係り先として「続く」と「気づいた」の両方の可能性があるが, 「あと」の場合は, 「気づいた」に係る読みが出やすく, 「あとで, あとに」に置き換えた場合は「続く」に係る読みが出やすいのではなからうか。(18)も, 「あと」の場合は, 「分かれる」に係る読み, 「あとで, あとに」に置き換えた場合は「再就職する」に係る読みが, それぞれ出やすいようである(注6)。

(17) 今回は, 与ひょうが女房のつうを裏切って機を織る姿を盗み見たあと, 機の音の沈黙がほぼ1分間も続くことに気づいた。(朝日)

(18) 結婚や出産を機に仕事をやめる人が多く, 子育てに専念したあと, 再就職する人と専業主婦とに分かれる。(朝日)

この傾向も, 「あと」が, 後件事態を含めた後続文脈の状況設定の働きをするのに対して, 「あとで, あとに」が前件事態の発生と後件事態の発生との時間的前後関係を主に示す働きがあるという違いの表面的な現れと考えられる。

さて, 以上のように, 「あと」と「あとで, あとに」にいくつかの違いが見られたが, これに基づいて, ここでは, 「あと」の基本的特徴を(19)のようにまとめておく。

(19) 「あと」の基本的特徴: 前件事態による, 後件事態の状況設定の表示

「あと」の基本的特徴は, 後件の状態・継続的事態および生起・完結的事態の存在・発生する状況を, 前件事態に基づいて設定することを表示することである。表現の中心は, 後件事態にあり, その後件事態の成立する(している)状況を, 時間的観点によって示す。すなわち, 前件事態の発生時点を基準として, その発生時点より時間的に「後」であるという状況を設定することを示す。したがって, 前件事態と後件事態とを同等に扱い, かつその時間的前後関係を表現することは表現の中心ではない。

4 「～シタあとで」と「～シタあとに」

4.1 前件事態と後件事態の関係

本章では, 「～シタあとで」と「～シタあとに」を対比的に取り上げ, 表現者が前件事態と後件事態との関係をどのようにとらえるか, という認識の違いという観点から, 両者の違いを明らかにする。

まず, 本節では, 実際の用例に基づいて, 前件事態と後件事態との関係に関して, 先行研究で指摘されてきたような違いが, 明確に, 「あとで」と「あとに」との間にあるのかということを検討する。

前件事態と後件事態との関係に関して, 2章の先行研究でも概観したように, 「時間的近接性の違い」「関係付けの意識の違い」「前件事態によって生じた空白を後件事態が充たすかどうかの違い」が指摘されている。

まず, 「時間的近接性」に関してであるが, (20)～(22)のように, 後件事態の発生が前件事態の発生の「直後」と解釈しうる場合に「あとで」が使われており, 一方, 後件事態の発生と前件事態の発生との間に時間的「間隔」があると解釈しうる場合に「あとに」が使われている用例があり, 基本的特徴とみることはできない(注7)。

(20) 終わったあとで, 突然, 特定科目のかさ上げという形でルールが変更になるのでは, 何を信じて受験すればいいのか。(朝日)

(21) 無駄遣いに慣れたあとで, 政府から急に「効率利用」への協力を求められても戸惑うばかりだ。(朝日)

(22) 公民資料を本にして配布したあとに起きた政治、経済、社会の出来事を追加資料の形でまとめたものだ。(朝日)

また、後述するように、「あとで」「あとに」ともに、後件に状態・継続的事態が取れる場合があり、この場合は、後件事態が前件事態の発生以前から継続しており、「直後」か「間隔」があるかという時間的近接性の性質による区別は意味をなさなくなる。

次に、「関係付けの意識の違い」であるが、「あとで」の前件事態の発生と後件事態の発生との間に偶然性が高いという指摘が寺村1992になされているが、これに関しては本章2節で扱う。

「前件事態によって生じた空白を後件事態が充たすかどうかの違い」というのは久野1973の指摘であるが、実際の用例の後件の述語動詞を調べてみると、(23)(24)のように「あとで」「あとに」ともに、「空白を充たし得るような動詞」（ただし2章で述べたとおり、どういう動詞が該当するかは曖昧である）が使われており、明確な違いは出てこない。

(23) 「あとで」の後件動詞の例

作る、置く、発表する、公表する、気力をみせる、進出する、など

(24) 「あとに」の後件動詞の例

起きる、多発する、姿を表す、乗り出す、悟る、強まる、など

さらに、(25)(26)のように、「あとに」の用例で、前件事態によって「生じた空白」を後件事態が「充たす」と見るよりも、一連の同一レベル（範疇）の事態の継起と見た方がよい用例も多い。

(25) 沖縄の20代の女性が、舞台を見た後に 言ったという。(朝日)

(26) それどころか、全面解除を決めた あとに 意見を聞いても、形式上は法にかなうことになっている。(朝日)

以上のように、「あとで」と「あとに」の前件事態と後件事態との関係の違いについては、それぞれの事態の客観的な関係を見るだけでは明確で決定的な違いは見られない。両事態の関係の違いについては、表現者の前後件両事態の関係の認識の違いに基づいて明らかにする必要があるのではなからうか。

なお、ここで補足的に記しておくが、「あとで」「あとに」ともに、後件事態として、(27)(28)のように、状態・継続性の述語が来ることもありうる。継続性の述語が来る場合は、「あとでさえ／あとにさえ、あとでも／あとにも」などの形で、前件事態の発生以前と同様の事態が、前件事態発生後も継続していることが示される。

(27) 小脳に移転したあとで さえ「即座に治療を受ければ記者活動を続けることも可能だという事実を証明してゆきたい」と気力を見せていた。(朝日)

(28) 海外先進国では、市販した後にも、多数の患者をその薬を使った群と使わなかった群の2グループに分け、5年、10年と追跡し比較する調査を行っている。(朝日)

4.2 基本的特徴

本節では、「あとで」と「あとに」の基本的特徴を明らかにし、その基本的特徴に基づいて、先行研究で指摘されてきた使い分けが生じる理由を考えていく。

まず、「あとで」「あとに」の基本的特徴を(29)(30)のようにとらえる。

(29) 「あとで」の基本的特徴：二つの生起・完結的事態の時間的順序の表示

(30) 「あとに」の基本的特徴：（一連の事態として認識される）前件の生起・完結的事態から後件の生起・完結的事態への場面転換的継起の表示

それぞれについて、説明を加える。

「あとで」は、時間的に前後関係のある二つの生起・完結的事態を、表現者が時間の「順序」に従って、並べて表現することが基本的特徴である。二つの事態の発生に、時間的前後関係さえあればよいので、寺村1992が指摘するように、前件事態の「生起のあと、それとまったく無関係に、偶然」後件事態が起こったという場合にも「あとで」が適することになるし、因果関係のある二つの事態も表せることになる。

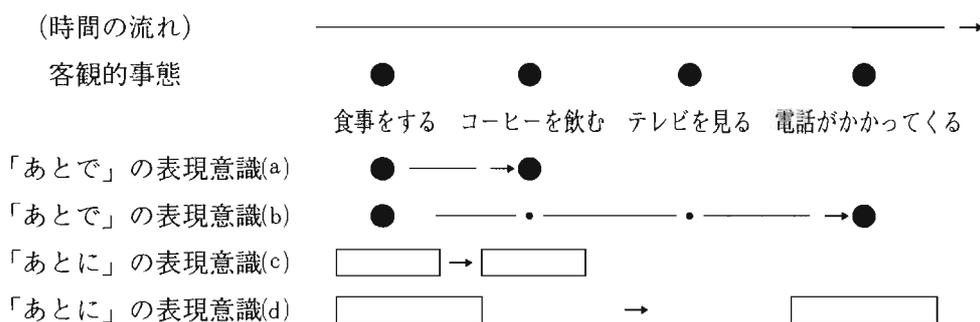
客観的に見た場合、二つの事態の間に、他の取り立てるべき事態が存在していることもありうる。「あとで」は、このような、前件事態と後件事態との間に、他の事態が挟まっているということを、表現意識としては排除しないと考えられる。そのために、二つの事態だけが、表現すべき関心のある事態とはならないので、客観的な事態の推移と照らし合わせて、「時間的近接性」は「直後」とも「間隔」があるとも解釈される。

一方、「あとに」は、時間的に前後関係のある二つの生起・完結的事態を、表現者が、同一レベル（範疇）の一連の関連ある事態として意識的に関係づけて表現することが基本的特徴である。したがって、表現者の意識としては、前件事態と後件事態は相前後する二つの事態としてとらえられる。つまり、二つの事態の間に、たとえ、事実として他の事態が挟まっていたとしても、表現意識としては、他の取り立てるべき事態は存在しないと把握されているのである。このために「前件と後件とに意図的關係づけが含まれる」という特徴が生まれることになる。

さらに、表現すべき関心のある事態は、前件事態および後件事態であるために、前件事態から後件事態へ場面が一気に転換する印象を与える。この印象が、「直後」「前件の空白を後件が充たす」などとして解釈されやすい理由である。また、一般的に見て、二つの事態の関連性が濃いことが多い（表現者が無理に関連づけることもできるので必ずしもそうでなくてもよいが）ので、前件事態と後件事態との間に因果関係の解釈が生じることもありうる。

(31)~(34)の例文に即して、以上のことを図式的に示してみる。

- (31) 食事をしたあとで、コーヒーを飲んだ。(a)
- (32) 食事をしたあとで、電話がかかってきた。(b)
- (33) 食事をしたあとに、コーヒーを飲んだ。(c)
- (34) 食事をしたあとに、電話がかかってきた。(d)



客観的な生起・完結的事態として、「食事をする」「コーヒーを飲む」「テレビを見る」「電話がかかってくる」という事態が時間の流れに従って起こったとすると、どの二つの事態を取り上げるかで、いくつかの表現が可能であるが、ここでは、「食事をする」「コーヒーを飲む」「電話がかかってくる」の3つを取り上げる。まず、(31)(32)のように、「あとで」の場合は、二つの事態に時間的な前後関係があればよいのであり、(31)のように「直後」でもよく、(32)のように「間隔」があってもよい。また、(31)のように内在的な関連性があってもよいし、(32)のように「偶然」であってよい。一方、(33)(34)の「あとに」の場合、まず、(33)のように、客観的事態として「直後」の場合もありうるが、(31)の「あとで」と比べた場合、「食事をする」という事態と「コ

「水を飲む」という事態とが、同一の事態レベル（範疇）として捉えられるため、「食事をする前ではなくて」というニュアンスが生まれやすい。(34)であるが、この文がやや不自然に感じられる場合がある。その理由は、「食事をする」という事態と「電話がかかってくる」という事態とを、同一のレベルに属する一連の事態とは解釈しにくいと感じるためであろう。しかし、同一レベルの事態と認識するか否かは、表現者の事態の認識のし方によるものであり、たとえば、予め「食事をするまえに電話をくれるように言っておいたのに」などの文脈、すなわち、「食事をする」という事態と「電話がかかってくる」という事態のみを取り立てる文脈があれば、自然になるであろう。そして、その二つの事態のみを取り立てるということは、その二つの事態の間に何らかの関連性があるという認識があるということである。

5 「～シタあと」 「～シタあとから」

本章では、「～シタあと、～シタあとで、～シタあとに」に類似する「～シタあとは」および「～シタあとから」について、補足的にそれぞれの特徴を簡単に指摘しておく。

5.1 「～シタあとは」

「～シタあとは」のように「～シタあと」に「は」が後続する場合、(35)および(36)(37)のように、まず構文的に2つのタイプに分けることができる。

- (35) お客が帰ったあとは、みんなで大掃除だ。
 (36) 試験が終わったあとは、いつもコンパをする。
 (37) ジョギングをしたあとは、とても気分がいい。

(35)は、意味的には、「お客が帰ったあと、みんなで大掃除をする。」と同じであるが、表面上「一は一だ」という名詞述語構文として使われている。(36)(37)は「～シタあと」の従属節に「は」が付加されたものである。

なお、(36)(37)からも分かるように、「あとは」の後件事態は、「あと」と同じく状態・継続性の事態および生起・完結性の事態のいずれも取ることができる。

さて、次の(38)と(39)の違いから分かるように、「あと」との構文的特徴の大きな違いは、(下記の「対比」的用法を除いて)必ず、後件事態を表す述語は文末に来る、すなわち従属度が低いということである。これは「は」の性質から当然導かれることである。

- (38) 試験が終わったあと、いつもコンパをする楽しいクラスに移りたかった。
 (39) 試験が終わったあとは、いつもコンパをする楽しいクラスに移りたかった。

また、用法的には、前件・後件事態の性質および「は」の性質から、以下の①～④の4つに分けることができる。なお、「主題」と「対比」は連続している面がある。文脈的に「～スルまえ」と明示されていない場合は、解釈に揺れが生じることもある。

- ① 一般的恒常的事態（いつも／必ず／ふつう）の場合の「主題」的用法
- ② 一般的恒常的事態の場合の「対比」的用法
- ③ 個別的事態の場合の「主題」的用法
- ④ 個別的事態の場合の「対比」的用法

次の(40)～(43)は、それぞれ上記①～④の例である。

- (40) 本を読んだあとは、かならず元の場所にもどしなさい。
 歩いたあとは、気分がいい。
 (41) どんなにいい加減な人生を歩いている人でも、命に関わるような大病をしたあとは、自分の人生に

ついて真剣に考え始めるものだ。

42) A：昨日、家に帰ったあと、またどこかへ出掛けませんでしたか？

B：いや、家に帰ったあとは、ずっと家にいたよ。

43) これができなければ建築は認められないし、できたあとは理由なく空地にしておくことは許されない。(朝日)

なお、③の用法は、対話において質問文に対する返答として使われやすい。この場合は、後件事態は、(質問文に対して)否定的意味を持ちやすい。必ずしも、「ない」という否定の形式を付ける必要はないが、「はい、家に帰ったあとは、また出掛けました。」のように(質問文に対して)肯定的意味で答えると不自然になるか、または対比的意味が強くなることになる。

5. 2 「～シタあとから」

「～シタあとから」の実際の用例は、次の44の一例以外、見付けることができなかった。

44) 大統領に善処を約束しながら土壇場になるまで国内対策をひき延ばしてきた首相の姿勢、譲歩を小出しにして不透明行政の印象をさらに強めた官僚の抵抗、合意ができたあとから首相の足をひっぱる自民党派閥の政治的思惑と圧力団体の反抗などである。(朝日)

「あとから」は、順序性を強調し明示するという特徴がある。44では、「合意ができ」る前には、「首相の足をひっぱる」こともあろうが、「合意ができ」れば通常、「首相の足をひっぱる」ということなどしないという予測ないし期待がありながら、その順序が逆になって、まず、「合意ができ」次に「首相の足をひっぱる」ということがこの順序で起こったことを「あとから」で強調している。

同様に、作例であるが、45も通常の順序から逸脱していることが強く表されている。

45) 締切が過ぎたあとから、レポートを提出しても受け取れない。

また、「あとから」には、従来から指摘されているように、46のように、「～てから」「～て以来」に置き換えられる用法がある。後件で、現在の状態・継続的事態を表し、「あれ以来ずっとある状態が引き続き今にいたっている」(鈴木1978)という意味を表す。

46) あのことがあったあとから、ずっと体の調子が悪い。(鈴木1978より)

6 まとめ

本稿では、時間的後続性を表す従属節のうち、主に「～シタあと、～シタあとで、～シタあとに」の3形式を取り上げ、それぞれの基本的特徴を、次のようにとらえ、この基本的特徴に基づいて、後件事態の性質の違いや各形式の表面的な使い分けが生じることを見た。

47) 「～シタあと」の基本的特徴：前件事態による、後件事態の状況設定の表示

「～シタあとで」の基本的特徴：二つの生起・完結的事態の時間的順序の表示

「～シタあとに」の基本的特徴：(一連的事態として認識される)前件の生起・完結的事態から後件の生起・完結的事態への場面転換的継起の表示

また、類似の形式として「～シタあとは、～シタあとから」の特徴を補足的に述べ、「～シタあとは」には、一般的恒常的事態の主題的用法および対比的用法、個別的事態の主題的用法および対比的用法の4用法が区別されること、また、「～シタあとから」には、生起的事態の順序性を強調し明示する用法と前件事態発生以後に継続する状態を示す用法があることを見た。

注

- 1 出典の明示のない用例は、筆者の作例である。なお、用例に付した「*」はその用例が不自然であること、また「？」はやや不自然であることを示す。
- 2 以下の記述で、「～シタあと、～シタあとで、～シタあとに」などを、単に「あと、あとで、あとに」などと記すことがある。
- 3 久野1973と鈴木1978とでは、「あとで」に関して違いがあるが、ここでは鈴木の指摘を取り上げた。
- 4 「あとで、あとに」の後件に状態・継続性の事態が現れる実例もある。詳細は4章1節末尾参照。
- 5 用例出典の「朝日」は、電子ブック版『朝日新聞—天声人語・社説1985—1991 増補改訂版（英訳付）』（日外アソシエーツ発行・紀伊國屋書店発売）で検索した用例であることを示す。なお、本稿での実例は、この検索結果に多く基づいている。
- 6 ここで述べた読みの出やすさというのは、あくまでも、「あと」と「あとで、あとに」を比較した場合に傾向として指摘できることである。177では、「あと」と「あとで、あとに」のいずれでも「分かれる」に係る読みが正しいが、「あとで、あとに」に置き換えると「再就職する」に係る読みが優先されやすく、誤った読みが出てきやすい。
- 7 「時間的近接性」に関しての使い分けを見るために、次の(a)(b)の例文について、26名の大学生にそれぞれ自然さを判定してもらった。
 - (a) 晩ご飯を食べたあとで、すぐに勉強を始めた。
 - (b) 晩ご飯を食べたあとに、すぐに勉強を始めた。

この例文は、「すぐに」という直後性を示す副詞が入っているために、後件事態の発生が前件事態の発生の直後であるということが明示されている。判定の結果は、「(a)あとで」は「自然である：10人」「やや不自然である：6人」「不自然である：10人」となり、一方、「(b)あとに」は「自然である：14人」「やや不自然である：9人」「不自然である：3人」となり、傾向としては、「あとに」の方が自然さが高いと判定されたが、「あとで」を自然と判定した者、「あとに」をやや不自然と判定した者も多く、絶対的な使い分けとは言えない。

参考文献

- 工藤真由美1992「現代日本語の時間の従属複文」『横浜国立大学人文紀要 第二類 語学・文学 39』（横浜国立大学教育学部）
- 久野暉1973『日本文法研究』大修館書店
- 近藤要司1995「『ときは』の意味について」『日本語教育85』（日本語教育学会）
- 塩入すみ1995「トキとトキニとトキ（二）ハ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版
- 鈴木忍1978『教師用日本語教育ハンドブック③ 文法1』凡人社
- 寺村秀夫1992「時間的限定の意味と文法的機能」『寺村秀夫論文集I—日本語文法編—』くろしお出版（初出は、渡辺実編『副用語の研究』明治書院 1983年）
- 益岡隆志1995「時の特定、時の設定」仁田義雄編『複文の研究（上）』くろしお出版
- 李林根1983「『あとに』、『あとで』、『あと』及び『あとから』の特徴について」『日本語教育研究論纂1』（在中華人民共和国日本語研修センター）

（本学助教授 札幌校）